

## 母親の育児ストレスと母子相互交渉

### —縦断研究による検討—

中間報告

聖心女子大学大学院

長谷川 麻 衣

## A Longitudinal Study of the Influence of Parenting Stress on Mother-Child Interactions

An interim Report

University of the Sacred Heart HASEGAWA, Mai

本研究は、母親の育児ストレスが母子相互交渉場面における母親の子どもに対する養育行動と、どのように関連しているかを縦断研究により明らかにすることを目的とした。具体的には、研究1では4歳から5歳の幼児とその母親43組を対象とし、母親の育児ストレスと母子相互交渉場面での母親の養育行動との関連について明らかにした。その結果、育児ストレスが高い母親は、子どもからの問いかけなどに対して応答性が低いということが明らかになった。さらに、研究2では小学校に就学した研究1の調査協力者43組のうち27組を対象に、育児ストレスが高く母子相互交渉場面で不適切な行動がみられた母親の場合、研究2の母子相互交渉場面においても不適切な行動がみられるかについて検討を行った。研究2については現在、分析中であるため本論文では今後の分析計画について論じた。

**【キー・ワード】 育児ストレス, 母子相互交渉, 幼児, 縦断研究**

This study examined how parenting stress influences the behavior of the mothers of kindergarten-age children in the context of mother-child interactions under experimental situations in a longitudinal study. The participants in Study 1 were 43 mothers and their children aged between 4 to 5 years old. First, the parenting stress of the mother was assessed. Then, the interactions of each mother-child pair were observed in task-oriented situations in the laboratory. The results indicated that mothers with greater parenting stress behaved more inappropriately toward their children than did mothers with low parenting stress. Based on these results, Study 2 observed the interactions of mother-child pairs again for 27 mothers and their children, now aged 6 to 7 years old, who had participated Study 1. Finally, future plans concerning analysis of the research are discussed.

**【Key word】 Parenting Stress, Mother-Child Interactions, Mother Child Relationship, Young Child, A Longitudinal Study**

## 問題と目的

昨今、我が子への虐待が深刻な問題となっている。2003年にユニセフ・イノチェンティ研究センター (UNICEF Innocenti Research Centre, IRC) は、虐待による 15 歳未満の児童の死亡者数が先進国だけで約 3,500 人に上るとの結果を発表した (Innocenti Report Card, 2003)。WHO (World Health Organization) は、世界規模で考えるとこの数はさらに増え、約 57,000 人に上るのではないかと推定しており (World Health Organization, 2002)、虐待が世界において深刻な問題になっていることがうかがえる。日本もその例外ではない。先述のユニセフの発表によると、日本は虐待による児童の死亡者が先進国 27 か国中ワースト 10 位となっている。2005 年度の児童相談所への虐待に関する相談件数を見てみるとその数は 34,472 件であり、日本においても虐待が深刻な問題となっていることがわかる (厚生労働省大臣官房統計情報部, 2006)。この虐待に関する相談で特に注目すべきことは虐待者についてである。ユニセフの調査では実父によるものが 41.3%、実母が 38.9%となり、実父によるものが若干多い、あるいは両者にさほど差異がみられない結果となっている。一方、日本の場合は、実母による虐待が 61.13%、実父が 23.13%と圧倒的に実母による虐待が多くを占めている。さらに、日本の場合、実母による虐待が多いにも関わらず、虐待を行っている実母自身が児童相談所に電話をかけるのは、9.71%と 1 割に満たないということも注目すべきことである。これらの虐待の問題は日本における育児期の母親が抱える様々な問題を浮き彫りにしていると考えられる。

このような中、育児期の母親のリスクの一つである育児ストレスに着目した研究が多くされている (e.g., Belsky, Crnic, & Woodworth, 1995; Crnic & Acevedo, 1995; Howes & Markman, 1989; Wallace & Gotlib, 1990)。育児ストレスへの着目は、まだ虐待には至らない母親、しかし、そのようなリスクがある母親を早期発見し、育児支援をする上で重要な視点の一つであると考えられる。その中でも特に、幼児期の子どもを持つ母親の育児ストレスが注目される。なぜなら、この時期の子どもは乳児にみられる夜鳴き、むずがり、離乳困難、食事や排泄などによる問題が少なくなり、それらに関する母親のストレスは軽減されるものの、歩行が可能になったことによる行動範囲の広がり、言語の増加、自己の顕在化により、行動の統制の難しさ、反抗的な言動への対処の問題、他の子どもとの身体的、精神的な発達の違いなどが母親にとって新たなストレスとなると考えられるからである。事実、2005 年度、日本全国の児童相談所に寄せられた相談を内容別にみると、幼児期では乳児期のような相談内容は減少するものの友だちと遊べない、落ち着きがない、内気、緘黙など性格または行動上の問題に関する相談が増加している (厚生労働省大臣官房統計情報部, 2007)。これらのことから、母親の育児ストレスの中でも、特に幼児期の子どもを持つ母親に着目する意義があると考えられる。

しかし、これまでの幼児期の子どもを持つ母親の育児ストレス研究を概観すると、母親の育児ストレス要因や緩衝要因の探索など (e.g., Mulso, Calder, Pursley, & Peifman, 2002)、母親の精神的健康のみに着目したものが多く。これは、母親の精神的健康のメカニズムについては明らかにすることはできるものの、それが子どもに対してどのような影響を及ぼすのかについて明らかにできないといえる。母親のみに着目するのではなく、子どもとの関連を扱ったものとしては、子どもの問題行動との関連 (Fischer, 1990; Mash & Johnston, 1983; Suarez & Baker, 1997) について明らかにした

ものがある。しかし、これらは、子どもの問題行動について母親が質問紙などで回答するものであったため、母親の育児ストレスが子どもの問題行動にどのような影響を及ぼしているのかということについては直接的には明らかにはされていないと考えられる。母親の育児ストレスが子どもや母子関係そのものに与える影響について明らかにするためには、実際の母子相互交渉場面で母子がどのような母子相互交渉をするのかについては明らかにする必要があると考えられる。これにより、母親の育児ストレスが子どもや母子関係の形成に与える影響について明らかにすることができると考えられる。

さらに、これまでは育児ストレスが高い母親が実際の母子相互交渉場面でどのような行動をするのかということが明らかにされていないのに加え、そのように育児ストレスが高く、母子相互交渉において適切ではない行動が見られた母親の場合、その後の母子相互交渉場面において不適切な行動が続くのかという連続性、あるいは変化するのかという非連続性については明らかにされていない。このことについて明らかにすることにより、母親の育児ストレスのその時点のみの影響だけではなく、その後の母子関係への影響についても明らかにすることができると考えられる。

以上のことから、本研究では、次の2つのことを明らかにすることを目的とする。一つ目は、幼児を持つ母親の育児ストレスが実際の母子相互交渉場面とどのように関連するのかについて、二つ目は、そのように、育児ストレスが高く、実際の母子相互交渉において不適切な行動が見られた母親の場合、その後の子どもとの母子相互交渉場面での行動がどのようになっているのかについて明らかにすることを目的とする。

## 研究 1

### 目的

研究1では、幼児を持つ母親の育児ストレスが実際の母子相互交渉場面とどのように関連するのかについて明らかにすることを目的とする。具体的には、次のことを明らかにする。育児ストレスが高い母親は、育児ストレスが低い母親に比べて子どもの行動に対して不適切な対応をする傾向がより強いであろう。ここでいう不適切な対応とは、母子相互交渉場面で子どもの立場を考えた援助や励ましを与えることが少ない、子どもの問いかけを無視する、子どもに否定的な発言をする、子どもの課題とは無関係な行動を制御しない、子どもの反応を待たない、子どもに統制的な対応をする、自分の考えに固執するというような母親の反応をさす。

## 方 法

**調査協力者** 東京都内の私立幼稚園に通う年中組の4, 5歳児(男児23名, 女児20名)とその母親(22~47歳,  $M=35.21$ ,  $SD=3.99$ )の43組。このうち、専業主婦30名, パート・自営業の有職者13名, フルタイムで勤めに出ている母親はいなかった。調査は2004年6月から2004年8月までである。

## 調査内容

1. **母親の育児ストレスの測定** 幼稚園の母親を対象に飯島（2004）によって作られた幼稚園児母親用育児ストレス尺度（MCSS, The Mother's Caregiving Stress Scale for Kindergarten Children）を用いた。この尺度は、幼稚園児の母親を対象にした育児ストレス尺度であり、「母親としての無能力感」「夫婦関係の不協和」「母親の非社交性」「子どもの発達上の気がかり」「母親の身体的疲労感」「母子関係における愛着の不安定感」「母親への社会的・文化的圧力」「出産直後の不安定な気分」の 8 下位尺度、計 53 項目で構成されている。回答方法は、5 段階（1：全くそう思わない～5：非常にそう思う）で回答するものである。

本研究でこの尺度を用いるにあたり、尺度構成とその信頼性を検討するために質問紙調査を、東京都内の私立幼稚園 9 園の年中組に通う 4 歳から 5 歳児（男児 176 名、女児 170 名）を持つ母親 346 名（22-47 歳、 $M=35.15$  歳、 $SD=4.07$ ）を対象に行った。なお、本論文の観察調査に協力してくれた 43 組はこの質問紙調査の調査協力者のうち、協力を承諾した母親とその子どもである。

**MCSS の因子分析と尺度構成** MCSS（幼稚園児母親用育児ストレス尺度）が 8 因子で構成されているため、本研究においても 8 因子解を求めたところ（Varimax 回転）8 因子が得られた（説明率は 40.64%）。そして、因子負荷量が .40 に達しない 13 項目を削除し、最終的に 53 項目中 40 項目を採用した（Table 1）。第 1 因子は、自分の育児が正しいか自信がないといった内容であるため、「母親としての無能力感」と命名した（以下、「無能力感」と表記する）。第 2 因子は、夫は自分が期待するように協力してくれないといった内容であるため、「夫婦関係の不協和」と命名した（以下、「夫婦関係」と表記する）。第 3 因子は、幼稚園のお母さん同士の会話に疲れるといった内容であるため「幼稚園のお母さんとの対人関係」と命名した（以下、「対人関係」と表記する）。第 4 因子は、子どもの行動に気がかりがあるといった内容であるため、「発達上の気がかり」と命名した（以下、「発達」と表記する）。第 5 因子は、毎日くたくたに疲れるといった内容であるため、「身体的疲労」と命名した。第 6 因子は、出産後、理由もなくとても落ち込んだ経験があるといった内容であるため、「出産後の不安定な気分」と命名した（以下、「出産後気分」と表記する）。第 7 因子は、周囲の人たちに子どもの母親としてしか見られないといった内容であるため、「社会・文化による重圧」と命名した（以下、「社会・文化」と表記する）。第 8 因子は、子どもは私に一番なついているといった内容であるため、「母子関係における愛着の不安定感」と命名した（以下、「愛着」と表記する）。因子ごとの信頼性係数（Cronbach's  $\alpha$ ）をみると、社会・文化、愛着はそれぞれ .64、.70 とやや低い、他は .78 以上の値を示し、また、全尺度としての  $\alpha$  係数は .87 であった。

Table 1 育児ストレス尺度の因子分析結果（バリマックス回転後）

項 目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7	因子8
5 子どもをしつけたつもりなのに身についていない	<b>.62</b>	.10	.00	.14	.00	-.15	.00	.00
3 自分の育児が正しいか自信がない	<b>.61</b>	.00	.00	.23	.00	.11	.00	.00
2 子どもが自分の思うようにならない	<b>.58</b>	.11	.00	.00	.00	.00	.13	.00
8 必要以上に子どもを叱ってしまう感情的な自分が嫌いである	<b>.56</b>	.15	.11	.00	.13	.14	-.00	.00
4 子どもにどう接すればいいか分からない	<b>.52</b>	.00	.00	.33	.00	.13	.13	.00
9 子どものために色々しても、子どもには私の気持ちがほとんど通じていない	<b>.52</b>	.00	.00	.22	.00	-.00	.13	.12
6 子どもに甘くみられている	<b>.50</b>	.00	.00	.21	-.00	-.01	.23	.00
7 子どもに尊敬されていない	<b>.49</b>	.12	.00	.32	-.19	.00	.23	.13
1 子どもには怒っても効き目がない	<b>.45</b>	.15	-.11	.00	.00	-.17	.00	.14
13 夫は自分が期待するように協力してくれない	.21	<b>.72</b>	.11	.15	.00	.00	.00	.00
17 自分一人で子どもを育てている	.00	<b>.70</b>	.00	.00	.12	.00	.19	-.00
*15 夫に満足している	.10	<b>.70</b>	.00	.00	-.10	-.00	.12	.14
*14 夫は精神的に私を支えてくれる	.10	<b>.68</b>	.00	-.00	-.13	-.00	.17	.00
16 夫と話す時間が少ない	.00	<b>.50</b>	.00	-.00	.29	.14	-.00	.00
18 夫は忙しいため、子どもと過ごす時間がない	.00	<b>.46</b>	-.00	-.00	.27	.00	.00	-.11
19 育児のことで夫との間に意見の食い違いがある	.16	<b>.45</b>	-.19	.00	-.00	.12	.17	.00
21 幼稚園のお母さん同士の会話に疲れる	.00	.00	<b>.80</b>	.00	.12	.00	.00	-.00
22 子どもを介した幼稚園のお母さん同士の付き合いで気がかりなことがある	.00	.00	<b>.74</b>	.20	.17	-.00	.00	-.00
24 幼稚園のお母さんとは表面上の付き合いが多い	.18	.00	<b>.65</b>	.00	.10	-.00	.22	.00
23 幼稚園のお母さん同士のグループが気になる	.00	.00	<b>.54</b>	.28	.10	.12	.11	-.00
25 幼稚園のお母さん同士育児に対する考え方やしつけが異なる	-.00	.00	<b>.49</b>	.11	-.00	.00	.00	.00
32 他の子と比べて私の子どもは劣っている	.16	.00	-.00	<b>.72</b>	.00	-.00	.18	.00
29 子どもの発達に気がかりなことがある	.16	.00	.17	<b>.62</b>	.00	.14	.00	.00
33 私の子どもは私が期待していたほどのことができない	.22	.00	.00	<b>.55</b>	-.00	-.14	.16	.00
30 子どもの性格に気がかりなことがある	.40	.00	.10	<b>.51</b>	.00	.00	-.00	.16
28 子どもの行動に気がかりなことがある	.40	-.00	.14	<b>.47</b>	.00	.00	-.00	.00
31 子どもの体質に気がかりなことがある	.14	.00	.13	<b>.43</b>	.16	.21	-.00	.00
35 毎日くたくたに疲れる	.00	.00	.00	.00	<b>.83</b>	.00	.00	-.00
34 家事、育児に追われて睡眠不足の日々が続いている	.00	.23	.18	.00	<b>.74</b>	-.00	.00	-.00
36 育児をしていると自分の体力の限界を感じる	.12	-.00	.11	.13	<b>.54</b>	.00	.00	.00
51 育児に追われ、自由な時間、自分の時間がない	.00	.00	.15	.00	<b>.51</b>	.14	.19	-.00
53 出産直後、理由もなくとても悲しく感じた経験がある	.00	.00	.10	.00	.00	<b>.92</b>	.00	.00
52 出産直後、理由もなくとても落ち込んだ経験がある	.00	-.00	.00	.00	.00	<b>.87</b>	-.00	.00
45 頑張っているのに育児は評価されない	.14	.23	.18	.00	.20	.00	<b>.53</b>	.00
50 育児をしていると世間から取り残される	.22	-.00	.15	.11	.26	.27	<b>.49</b>	.00
44 周囲の人たちに「子どもの母親」としてしか見られていない	.00	.00	.12	.00	.00	-.00	<b>.48</b>	.00
48 世間では母親なら立派に子育てができて当然と考えている	.00	.00	.18	.00	.00	-.00	<b>.42</b>	-.00
*40 子どもは私が一番好きである	.26	-.00	.00	.00	-.00	-.00	-.14	<b>.80</b>
*39 子どもは私に一番なついている	.29	-.11	.00	.00	-.00	-.00	-.00	<b>.78</b>
*41 親にとっても可愛がられた	.00	.15	.00	.00	-.00	.11	.31	<b>.45</b>
固有値	8.11	3.12	2.55	1.99	1.81	1.50	1.36	1.12
因子寄与率 (%)	15.30	5.89	4.80	3.76	3.41	2.82	2.57	2.11
累積寄与率 (%)	15.30	21.2	26	29.7	33.1	36	38.5	40.6

\*は逆転項目

2. **母子相互交渉の観察** 母子交渉の質的な差異を明らかにするために、母子が協力して課題を遂行する必要があるものの、母子の行動の自由度が大きい、図形伝達課題と図形完成課題の2つの課題を用いることにした。課題試行中の母子相互交渉は調査協力者の許可を得た上で、すべてビデオで録画した。具体的な観察場面は次の通りである。まず、観察室の中央部分に縦 60 センチ、横 120 センチ、高さ 45 センチの机を用意した。そして、横の面のところに向きあう形で椅子を置き、母子に机をはさみ向き合う形で座ってもらった。ビデオは 80 センチの高さの三脚の上に乗せ、子どもの左側（母親の右側）方向、机から 1.5 メートルの位置に設置し観察を行った。

### (1) 母子相互交渉の課題

**課題 1：図形伝達課題** これは Dickson (1981) が考案した The Picture Communication Game を応用したものである。課題は 4 つの図形のうち、ターゲットはどれかを当てるというものである。すなわち、4 つの図形の中の 1 つの図形が、母子があてるターゲット図形である。母親のみにどれがターゲット図形かを知らせて、子どもにターゲットはどの図形かを同じ 4 つの図形からなるセット（ただし配置が母親のものとは異なる）からあてさせるという課題である。母親には 4 つの図形が 1 枚のカードに描かれたカードを渡した。そして、4 図形のうちどれがターゲットの図形かをシールを貼って示した。子どもにはこの 4 つの図形が 1 つ 1 つ取り外せるようになっている埋め込み式のカードを与えた。問題は練習試行 2 問、本試行 7 問の計 9 問である (Figure 1)。

手続きは次の通りである。机をはさみ、母子で向き合う形で椅子に座る。母親に母親用カードを渡し、シールがついた図形がどれかを子どもにわかるように自由に考え言葉で説明するように教示した。注意点として、母親は子どもに図形を説明する際、自分のカードを子どもに見せないこと、また子どもに「一番目」などと図形の位置を言わないこと、問題は子どもが正解するまで行うことを説明した。一方、子どもには、母親からの図形の説明を聞き、その説明と合致すると思う図形を自分のセットからはずして、母親に見せるよう教示した。問題は子どもが正解するまで行うことを説明した。具体的な教示は以下の通りである。「(子どもに) これからあてっこゲームをします。○○ちゃんの前に 4 枚の絵がありますね。お母さんも同じカードを持っています。お母さんがその中のどれかのカードについて説明します。○○ちゃんはお母さんの説明を聞いて、自分の 4 枚のカードの中から、お母さんが説明するカードがどれかを当ててください。『お母さん、このカードのこと言ってるんだ。』と思ったら、カードを取ってお母さんに見せてください。カードを見せたあとは元の場所に戻してください。(母親に) ゲームはお子さんがカードを当てるまで何回でもやって頂いてけっこうですが、できるだけ 1 回の説明でお子さんが当たるように説明して下さい。説明するときは、『一番目』など順番を言わないで下さい。また、説明するときにご自分のカードをお子さんに見せないで下さい。」なお、図形伝達課題では制限時間は設けず、子どもが正答するまでその試行を行ってもらった。問題 1 から問題 7 までの観察時間は 8 分から 13 分であった。

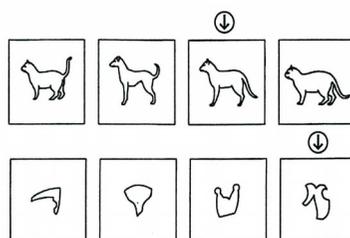


Figure 1 図形伝達課題の例, 母親カードより (上: 課題1: 下: 課題7)

**課題2: 図形完成課題** 図形完成課題は、52個の小さな形のピースを使って見本と同じ形を組み立てるというものである(商品名: PIKY DECORS, メーカー: PIKY)。課題の図形は筆者が作成した。ピースの裏にはマグネットがついており、ピースをマグネット式のボードに置いていく。手続きは次の通りである。まず、図形完成課題の見本の図版を母子に提示した。そして、課題を5分以内で完成してもらおうこと、5分になったら知らせるので、課題が途中で完成するのをやめてもらうことを教示した。具体的な教示は以下の通りである。「これからパズルゲームをします。〇〇ちゃんはお母さんと一緒に、この見本と同じになるように、このボードの上に図形を作ってください。時間は5分です。3分になったところで私が『あと2分です』と言います。5分になったら私が『5分になりました。』と言うので、そこでパズルを作るのを止めてください。(母親に) このパズルはこの年齢のお子さんには難しいのでお母さんとお子さんと一緒に作って下さい。」5分以内で図形を完成できずになお子どもが続行することを希望した場合には、最後までしてよいことにした。

## (2) 分析の手続き

**プロトコルの作成** 録画された発話、および行動はすべて文字化し、プロトコルを作成した。以下に図形伝達課題と図形完成課題試行中の母子のやり取りのプロトコルの例を示す(Table 2 図形完成課題)。右枠内は子どもの発話と動作、左枠内は母親の発話と動作である。なお、( )には母親、子どもそれぞれの行動を示した。

Table 2 プロトコルの例 (図形完成課題)

母親の発話と行動	子どもの発話と行動
間違えないようにしなきゃ、〇〇がんばろうよ。 ママさ、上のほうするから、じゃあ、〇〇、 下の方、顔のところあるじゃない？そこやってよ (ボードを指しながら) (黄緑 1 を置く) ほらほら、顔、顔このへんかな？ (女の子 2 と男の子 2 を置く) じゃあ〇〇、そのへんやってやって (ボードをさして)	
	(黄色 2 を置く)
女の子でしょ？ (女の子 1 を置く) これでしょ？ (男の子 1 を置く) (女の子 2 を置く)	
	お母さんこれ (ピースを母親に見せる)
じゃあ〇〇、その下やってくれる？	
	うん (うなずく)
(黄緑 2 を置く)	
	これ何色？
途中省略	
	(ピースを置く)
できた～！！ (拍手をする)	

**母親の行動の分析** そして、そのプロトコルを Table 3 に示すように 6 つのコードによって、母親の行動の特徴を明らかにすることにした。「母親の子どもへの援助」「母親の子どもへの励まし・称賛」「母親の応答性の低さ」「子どもの逸脱行動の放任」「母親の統制」「母親の自分の主張への固執」が 6 つのコードである。このコードを用いて、図形伝達課題と図形完成課題のプロトコルにおける母親の行動を課題別に分析した。

図形伝達課題では、7 問それぞれについてコーディングを行なった。その際、上記の 6 つのコードに該当する行動が一度でも出現すれば 1、その行動が出現しなければ 0 とした。たとえば、問題 1 で「母親の子どもへの援助」が見られれば 1、見られなければ 0 とした。同様に他のコードについても問題ごとに分析を行った。そして、問題 1 から問題 7 までの各コードの合計得点を算出した。すなわち、問題が 7 問あるため、それぞれのコードの得点は最大が 7、最低が 0 となる。また、図形完成課題では、初めの 5 分間について分析することにした。図形完成課題では、5 分間のうちに、そのコードに該当する行動が出現すればその回数だけコードし、その行動が出現しなければ 0 とした。なお、母子相互交渉課題のコーディングの一致度について発達を専門とする大学院生 1 名と筆者との間でみたところ、図形伝達課題は 93.33% (Cohen's Kappa = .82)、図形完成課題は 91.67% (Cohen's Kappa = .83) であった。

Table 3 コードの名称および定義と例

コードの名称	定義と例
母親の子どもへの援助	<p>子どもの課題遂行のしやすさを考えた、課題試行中における子どもへの母親の援助。</p> <p>(図) 「○○ちゃんが持っている○○に似てるよ」など、子どもの個人的な経験を引き合いにして説明する。</p> <p>(パ) 子どもがピースを取りやすいように、母親が色別にピースをまとめて置く。</p>
母親の子どもへの励まし・称賛	<p>母親が子どもに、「がんばって」「よくできたね」など、励ましや称賛の言葉をかける。</p>
母親の応答性の低さ	<p>子どもの発言や行動に対し、否定的な発言をしたり無視したりする。</p> <p>(図) 子どもが母親にカードを見せたとき、「どうしてそれになる」などと、否定的な発言をする</p> <p>子どもが母親にカードを見せたとき、それに対して正解とも不正解とも言わない、あるいは反応しない。</p> <p>(パ) 子どもがピースを置いても反応しない。</p>
子どもの逸脱行動の放任	<p>課題試行中、子どもがソワソワ・キョロキョロ・立ち上がるなど課題とは無関係な行動をしてもそれを静止せず、そのままにさせる。</p>
母親の統制	<p>母親が子どもに指示をする。</p> <p>(図) 子どもがカードに少し触れた段階で「そのカードを取って」と指示する。</p> <p>(パ) 「ここに置きなさい」と母親が子どもに指示をして、ピースを置かせる。</p>
母親の自分の主張への固執	<p>母親自身の説明の仕方や方略に固執する。</p> <p>(図) 一回目の説明で子どもが間違っても関わらず、その後も2度以上、同一、あるいは違う言葉でも同類の説明を繰り返す。</p> <p>(パ) 「ここに赤、赤、赤」などと母親が置かせたい位置に固執して子どもにピースを置かせる。</p>

## 結果と考察

### 1. 育児ストレス高群、低群の選出について

42名の母親の育児ストレス合計得点の分布を検討し、最頻値に属する調査協力者3名を除き、その得点よりも高い群を育児ストレス高群(98点以上, 21名), 低い群を育児ストレス低群(93点以下, 18名)とした。なお、本研究の調査協力者の育児ストレス得点分布をみると、前述の育児ストレス尺度に関する質問紙調査の調査協力者の育児ストレス得点分布とほぼ同様であった。さらに、育児ストレス高群、育児ストレス低群ともに質問紙調査における育児ストレス高群と低群に属する調査協力者であった。

### 2. 育児ストレスと母子相互交渉

次に、育児ストレス高群と低群の母親が図形完成課題での子どもの反応への対応に差があるかを  $t$  検定でたしかめた (TABLE 3)。その結果、「母親の応答性の低さ」( $t(37) = 2.67, p < .05$ )において有意な差があり、「母親の子どもへの励まし・称賛」( $t(37) = 1.70, p < .10$ )において有意傾向の差がみられた。すなわち、図形完成課題では、育児ストレスが高い母親ほど子どもからの反応を

無視するといった応答性の低さがみられた。一方、育児ストレスが低い母親ほど、図形完成課題の試行中に子どもを励ます、誉めるといった対応をする傾向があることがみられた。

## 研究 2

### 目的

研究 1 では、育児ストレスが高い母親ほど母子相互交渉場面において不適切な行動をとることが明らかになった。それでは、そのような母親というのは、その後、研究 1 と同様の母子相互交渉場面において、どのような行動をするのであろうか。そこで、研究 2 では、育児ストレスが高く、不適切な母子相互交渉を行っていた母親というのが、その後、母子相互交渉場面でどのような行動をとるのかを縦断研究により明らかにすることを目的とする。具体的には、次のことについて明らかにする。研究 1 において、育児ストレスが高く、不適切な母子相互交渉を行っていた母親というのは、その後の母子相互交渉においても不適切な母子相互交渉を行っているであろう。

## 方 法

**調査協力者** 研究 1 の調査協力者 43 組の母子のうち、引き続き調査への協力を承諾した母子 27 組。具体的には、東京都内の小学校に通う 1 年生、6 歳から 7 歳の児童（男子児童 16 名、女子児童 11 名）とその母親（31～46 歳、 $M=36.48$ ,  $SD=3.33$ ）である。このうち、専業主婦 15 名、パートあるいは自営業の仕事を持つ母親 11 名、フルタイムで働いている母親 1 名であった。調査時期は 2007 年 2 月から 2007 年 3 月までである。

## 調査内容

1. **母親の育児ストレスの測定** 母親の育児ストレスを測定するため、研究 1 で用いた幼稚園児母親用育児ストレス尺度（MCSS, The Mother's Caregiving Stress Scale for Kindergarten Children）を用いた。その際、質問項目に「幼稚園」という言葉が含まれる項目 2 問のみ、「小学校」に直して用いた。具体的な説明は研究 1 で行ったため、ここでは省略する。

### 2. 母子相互交渉の観察

**図形完成課題** 課題試行中の母子の相互交渉をみるため、図形完成課題を母子でしてもらった。図形完成課題は、40 個の正方形のピースを使って見本と同じ形を組み立てるというものである（商品名：PIKY DECORS, メーカー：PIKY）。ピースの裏にはマグネットがついており、ピースをマグネット式のボードに置いていく。手続きは研究 1 と同じ教示を行った。具体的な教示についてはここでは省略する。なお、観察場面も研究 1 と同様、机を挟み向き合う形で座り、母子相互交渉課題を行ってもらった。なお、録画された発話、および行動は研究 1 同様、すべて文字化し、プロトコルを作成した。

## 分析の今後の計画

研究1では、4歳から5歳の子どもを持つ母親とその子どもを対象とし、育児ストレスを持つ母親が母子相互交渉場面でどのような養育行動をとるのかを明らかにした。その結果、育児ストレスが高い母親は、子どもが母親に話しかけたときに無視をするなど応答性が低いことや褒めたり励ましたりすることが少ないことが示された。

研究1の結果をふまえ、研究2ではそのように育児ストレスが高く、母子相互交渉課題において不適切な養育行動をしていた母親が、その後、同じような母子相互交渉場面でどのような養育行動をするのかについて調査を行った。

今後の予定としてはまず第1に、研究1での分析同様、Table 3の6つのコードを用いて研究2のプロトコルのコーディングを行う。そして、第2に、研究1で育児ストレスが高かった母親というのが、研究2においても同じように育児ストレスが高いのか、また、不適切な養育行動がみられるのかという育児ストレスと養育行動スタイルの連続性について明らかにする。

## 引用文献

- Belsky, J., Crnic, K., & Woodworth, S. (1995). Personality and parenting : Exploring the mediating role of transient mood and daily hassles. *Journal of Personality*, **63**, 905-929.
- Crnic, K., & Acevedo, M. (1995). *Everyday stresses and parenting*. In M. H. Bornstein(Ed.), *Handbook of parenting*. Mahwah, NJ : Lawrence Erlbaum. Pp.227-297.
- Crnic, K. A., & Booth, C. L. (1991). Mothers' and fathers' perceptions of daily hassles of parenting across early childhood. *Journal of Marriage and the Family*, **53**, 1042-1050.
- Crnic, K.A., & Greenberg, M. T. (1990). Minor parenting stresses with young children. *Child Development*, **61**, 1628-1637.
- Dickson, W. P. (Ed.). (1981). *Children's Oral Communication Skills*. New York : Academic Press.
- Dickson, W. P., Hess, R. D., Miyake, N., & Azuma, H. (1979). Referential communication accuracy between mother and child as a predictor of cognitive development in the United States and Japan. *Child Development*, **50**, 53-59.
- Fischer, M. (1990). Parenting stress and the child with attention deficit hyperactivity disorder. *Journal of Clinical Child Psychology*, **19**, 337-346.
- Forgays, D. K., & Forgays, D. G. (1993). Personal and environmental factors contributing to parenting stress among employed and nonemployed women *European Journal of Personality*, **7**, 107-118.
- Howes, P., & Markman, H. J. (1989). Marital quality and child functioning : A longitudinal investigation. *Child Development*, **60**, 1044-1051.

- 飯島さやか. (2004). 幼児の母親用育児ストレス尺度 (MCSS) の作成－妥当性・信頼性の検討－ 聖心女子大学大学院文学研究科修士論文 (未公刊)
- 厚生労働省大臣官房統計情報部. (2007). 平成 17 年度社会福祉行政業務報告 財団法人厚生統計協会 Pp.362-363.
- Lazarus, R. S. (1991). Cognitive and motivation in emotion. *American psychologist*, **46**, 352-367.
- Lazarus, R. S. & Folkman, S. (1986). *Stress, appraisal, and coping*. New York : Springer.
- Mash, E., & Johnston, C. (1983). Parental perceptions of child behavior problems, parenting self-esteem, and mothers' reported stress in younger and older hyperactive and normal children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **51**, 86-99.
- Mulsow, M., Caldera, Y., Pursley, M., Reifman, A., & Huston, A. (2002). Multilevel factors influencing maternal stress during the first three years. *Journal of Marriage and Family*, **64**, 944-956.
- Teti, D. M., Nakagawa, M., Das, R., & Wirth, O. (1991). Security of attachment between preschoolers and their mothers : Relations among social interaction, parenting stress, and mother's sorts of the Attachment Q-Set. *Developmental Psychology*, **27**, 440-447.
- Wallace, P., & Gotlib, I. (1990). Marital adjustment during the transition to parenthood : Stability and predictors of change. *Journal of Marriage and the Family*, **52**, 21-29.